◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆

愛媛県立図書館 読書会協力図書
新規受入セットのご紹介(一般向け) 平成 31 年版目録掲載

0 読書・雑書

062 AI vs.教科書が読めない子どもたち

新井紀子著 東洋経済新報社 2018 年 287p

「ロボットは東大に入れるか」と名付けた人工知能(AI)プロジェクトを始めた著者は、人知を超える「真の意味でのAI」は登場しないと断言する。しかし、全国調査で判明した若者の読解力の低下は危機的状況で、このままでは多くの仕事が AI に代替される日が来るかもしれない……。気鋭の数学者が提言する日本の未来予想図。

2 歴史の旅・地理の旅

294 おかげさまで、注文の多い笹餅屋です

桑田ミサオ著 小学館 2018 年 157p

青々とした笹の葉、なめらかでもっちりとした餅生地。 その“までぇな(真心をこめた)”笹餅は、太宰治の故郷、青森県五所川原市金木町(かなぎちょう)に住むミサオさんの手から生まれる。27 kgの米俵を抱える 90 歳の笑顔は、笹餅を通して人の輪を広げ続けている。平成 26 年度ふるさとづくり大賞総務大臣賞を受賞したおばあさんと笹餅の話。レシピ掲載あり。

3 社会の問題

3172 定年が楽しみになる!オヤジの地域デビュー

清水孝幸著 佐藤 正明絵 東京新聞 2018 年 225p

定年を目前にした 50 代新聞記者の「オジサン」が、会社に代わる居場所づくりに奔走する奮闘記。地域の料理教室やダンス教室、小学生の放課後見守りボランティアなどに果敢に挑戦していく。「紅」一点ならぬ「黒」一点にもめげない姿は清々しい。東京新聞連載記事「50 代の地域デビュー」から 50 話を厳選し、加筆・修正して出版。

7 心のうるおい(趣味と芸術)

751 鬼才伝説 私の将棋風雲録

加藤一二三著 中央公論新社 2018 年 268p

「将棋は芸術だ」。「ひふみん」の愛称で知られる棋士・加藤一二三が、デビューから引退、そして今後の展望を、天賦の洞察力をもって綴った1冊。カトリックの教え、クラシック音楽……心を寄せる思想と芸術には、将棋との接点があった。「将棋は感動できるもの」と話す著者が対戦した、強豪棋士との熱戦の棋譜がここに蘇る。

9 詩歌・随筆・記録・外国文学

9399 最後まで、あるがまま行く

日野原重明著 朝日新聞出版 2018 年 183p

聖路加国際病院名誉院長で、2017 年に 105 歳で亡くなった著者が 91 歳から始めたのは、朝日新聞日曜版「be」への連載『あるがまま行く』。連載は、亡くなる直前まで口述筆記で行われた。本書は、101 歳以降に書かれたものから 44 本を厳選。体の変化や車いすの利用など、老いに伴う色々な思いも前向きに生きるエネルギーに変え、最後まで生ききった著者のエッセイ。

9400 自閉症それがどうした!

濱田斉子著 文芸社 2018 年 241p

著者は松山市在住。自閉症と診断された息子との、誕生から就職までのパワフルな日々を綴った一冊。障がい児ではなく、「濱田晋太郎」を育ててきたのだと著者は言いきる。明日を切り開いていった著者の大胆な選択と出会いの数々とは。彼らと関係の深い 31 名の寄稿文からは、著者の視点とは異なる、息子の姿を垣間見ることができる。

◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆

◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆

愛媛県立図書館 読書会協力図書
新規受入セットのご紹介(一般向け) 平成 31 年版目録掲載

F 小説

F576 屍人荘の殺人

今村昌弘著 東京創元社 2017 年 316p

ミステリ愛好会の大学生・葉村は、「事件のないまま夏を過ごすわけにはいかんだろ」と主張する会長の明智とともに、脅迫状が届いている映画研究部の夏合宿に参加することに。近くで起きたバイオテロによって陸の孤島と化した山荘で、密室殺人事件が起こる。連続殺人の謎が鮮やかに解き明かされる本格推理小説。第 27 回鮎川哲也賞受賞。

F577 たゆたえども沈まず

原田マハ著 幻冬舎 2017 年 408p

夢を抱いてフランスに渡った日本人画商、忠正と重吉。浮世絵の国、日本に焦がれたオランダ人兄弟、フィンセントとテオ。パリで出会った四人の絆が一人の画家を誕生させた。後期印象派の代表的画家として知られるゴッホと彼を取り巻く人々の、それぞれの闘いを描いたアート小説。

F578 かがみの孤城

辻村深月著 ポプラ社 2017 年 554p

入学直後学校に行けなくなった中学１年生のこころは、突然光りだした鏡に吸い込まれる。その先にあった城には、こころと同じ境遇の中学生がいた。集められた７人で、願い事がひとつだけ叶う“願いの鍵”探しが始まるが……。７人の背景と思いが徐々に明らかになり、怒涛のラストに向かう。物語の世界が鮮やかに立ち上がる、2018 年本屋大賞受賞作。

F579 おらおらでひとりいぐも

若竹千佐子著 河出書房新社 2017 年 164p

故郷を離れて 50 年。子どもを育て上げ、亭主も見送った桃子さん。もう自分は何の生産性もない、いてもいなくてもいい存在。――おらの思っても見ながった世界がある。そござ、行ってみって。おらおらで、ひとりいぐも。――桃子さんの心の内に氾濫する東北弁が、孤独と自由を謳いあげる。第 54 回文藝賞、第 158 回芥川賞受賞。

◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆◆◇◆